

タイトル 「卒業したい男と女」

作・伴 一彦

参考資料… 映画 「卒業」 (監督・マイク・ニコルズ)

登場人物―

吉沢恵一

小山あかり

バルの店員

ミュージシャン

■ ライブハウス

スポットライトに浮かび上がるミュージシャン。

陰気な雰囲気、俯いたままボソボソと話す。

ミュージシャン どうもありがとうございます。じゃ、俺の歌を聞いて下さい。サイモンとガーファンクル「ミセス・ロビンソン」です。

ミュージシャン、歌い出す。

下手。

スポットライト、呆れたように消える。

■ バル・店内

― 繁華街にあるバル。

カップルやグループでほぼ満員。

立ち飲みスタイルだが、小さな丸テーブルが二つ。

吉沢恵一、丸テーブルで一人ビールを飲んでいる。

恵一、ため息をつく。

小山あかりが店に入ってくる。

恵一、一瞬目をやるが、落胆した様子で視線を外す。

あかり、店内を見回し、恵一の前の椅子に腰掛ける。

恵一、え？ とあかりを見る。

あかり、恵一は気にせず店員に手を上げる。
店員、やってくる。

店員 いらっしゃい。はい、ワインリスト。
あかり (ニコツ) 判ってらっしゃる。

店員、戻っていく。

あかり、鼻歌を歌いながらワインリストを見る。

恵一 あの……

あかり (気が付かない) ……。

恵一 あの！

あかり え？ 私？

恵一 そこ。

あかり はい？

恵一 すみません。

あかり この席？

恵一 そうです。

あかり ダメなの？

恵一 すみません。

あかり 見てよ、混んでるでしょ？

恵一 だけど、フツー座らないでしょ、他人(ひと)の席
に。

あかり 他人の席って……。

恵一 連れがいるって思いませんか？

あかり いるの？

恵一 ……いないけど。

あかり なんだ、それ。

恵一 (ちよっとムツと) みんな立って飲んでるでしょ？

あかり 空いてるんだからいいじゃない。

恵一 いや、来るかもしれないから……。

店員がお通しを持ってやってくる。

店員 (恵一に) あかりさんの知り合いだったんですね。

恵一 いや、知り合いじゃ……。

あかり これ、お願いします。ボトルで。

店員 了解。

と、カウンターへ戻っていく。

あかり 名前は？

恵一 あ？

あかり だから名前。

恵一 俺の……

あかり 今、私が話しているのはあなたでしょ？

恵一 (ムカムカ) なんで名乗らなきゃいけないんだよ。

あかり 不公平だから。

恵一 何が。

あかり あなたは私の名前を知ってる。でも、私はあなたの名前を知らない。

恵一 俺だって知らないよ。

あかり 聞いたでしょ？

恵一 覚えてない。

あかり ウソ。

恵一 興味ないから。

あかり でも、覚えてたでしょ？

恵一 覚えてない。

あかり なに、その頑なさ。

恵一 悪いけど、話しかけないでくれる？

あかり なんで？

恵一 一人で静かに飲んでるんだから。

あかり こんな騒がしい店で？

恵一 人と話したくないんだ。

あかり だったら家に帰れば？

恵一 キミが帰れよ。

あかり 黄身が孵ったらひよこだ。

恵一 え？

あかり (ウインクして) ね。

恵一 (判って) くだらない。黄身だけじゃ孵らないよ。

あかり おー。

恵一 なんだよ。

あかり 会話が成立してきた。

恵一 どころが。

店員、やってきてワインとグラスを二個テーブルに置く。

恵一 ちょっと、グラスは一個で…。

店員、他の客に呼ばれて行ってしまふ。

恵一 ったく。

あかり、ワインボトルを恵一に突き出す。

恵一 いらないよ。

あかり 違う。ワイン手酌させる気？

恵一 え？

あかり 女はワインに触っちゃいけないんだよ。

恵一 俺に注げって？

あかり、ワインボトルを恵一に握らせ、グラスを突き出す。

恵一、ムツとなり、ぞんざいにワインを注ぐ。

あかり あ、そんなに……ほら、溢れたしい。

恵一 ……。

あかり はい。こっちにも。

と、もう一方のグラスも突き出す。

恵一 いらない。

あかり ホントは飲みたいクセに。

と、恵一からボトルを奪い、ワインをグラスに注ぐ。

そのグラスを恵一に強引に持たせ、

あかり かんぱーい。

と、グラスをぶつける。

恵一 ちょっと！

あかり なに？

恵一 (うんざり顔で) なんでもない。

あかり、美味しそうに飲む。

店のドアが開く。

恵一、あかり、同時に目をやる。

入ってきたのは外国人客。

二人とも落胆のため息。

お互いにそのことに気づき、咳払いをして視線を戻す。

あかり 誰か待ってるんだ。

恵一 別に。

あかり なんで隠すの？

恵一 キミは誰を待ってるんだよ。

あかり 関係ないでしょ。

恵一 ストーキングか。

あかり はあ？

恵一 やめたほうがいいんじゃない？ 警察捕まっちゃうよ。

あかり あのねー。

恵一 ここは彼の行きつけのバル。彼は電話をしてもメールをしてもノーリアクション。それでもしつこく電話をかけたら着信拒否。メアドも変わってしまった。LINEもツイッターもフェイスブックもブロックされた。家に行ってもオートロックで入れない。会社に行ったって追い返されるだけ。だからここで毎晩彼が来るのを待っている。でも、彼は現れず、顔見知りになった店員とバカ話をして飲み、終電間近に帰っていく。その背中に店員の隣れみの視線が注がれていることも知らずに。

あかり よくもまあ勝手なストーリーをでっち上げられるね。

恵一 当たらずといえども遠からず、だろ？

あかり じ、自分はどうなのよ。

恵一 やっぱり当たりだ。

あかり おまわりさん、ストーカーがいまーす！

店中が二人に注目する。

恵一 (慌てて) ち、違います！ (あかりに) 頼むよ。

あかりは悪びれずにワインを飲む。

恵一 (ため息で) ……俺はストーカーにはならないよ。

あかり だったら誰のために席を空けてるの。

恵一 ……。

あかり ……？

恵一 本当は……。

あかり 本当は？

恵一 素敵な女性がいたら一緒に飲もうと思ってたんだ。

あかり ほー、ナンパヤロオか。

恵一 ま、今日のところはキミでいいや。

あかり 冗談。早く他の席空かないかな。

恵一 立って飲めばいいだろ。

あかり 危ない。そうやって追い払う作戦か。

あかり、空いた二人のグラスにワインを注ぐ。

恵一 遠慮なく。

と、一気に飲み干す。

あかり ちょっと、そんな飲み方しないで。安いワインじゃないんだよ。

恵一 俺が払う。

あかり 名前も知らない人に奢られたくない。

恵一 吉沢恵一。

あかり ふうん。フツーだね。

恵一 あかりに言われたくない。

あかり やっぱり名前憶えてるじゃない。

恵一 (店員に) ワインリスト下さい。

店員がワインリストを持ってくる。

恵一 (指差して) これ、お願いします。

あかり (リストを覗き込んで) ちょっと、この店で一番高いヤツじゃない。

恵一 俺が飲むの。

あかり 勝手にすれば。

恵一 (店員に) グラス二つ。

店員、カウンターへ。

あかり ほー。

恵一 飲みたくなきゃ飲むな。

あかり もちろんいただきます。その前にこっち片付けなきゃ。

と、グラスに残ったワインを飲み干す。

恵一も負けじと飲み干す。

x

x

——時間後。

かなり空いた店内。

恵一とあかりは相変わらず同じテーブルで飲んでいる。
二人とも酔いが回っている。

恵一 だから、それはおかしいって。

あかり 何がおかしいの？

恵一 だから、それ。

あかり それって？

恵一 だから、キミが言ってたそれ。

あかり 映画の話？

恵一 ん……違う。

あかり だったら何。

恵一 ん……ま、いいや。忘れた。

あかり 人に絡んどいてなんだよ、恵一。

恵一 あ？ なんて俺の名前知ってるんだ。

あかり 自分で名乗ったでしょ？

恵一 キミの名前はなんだっけ。

あかり あかり。あなたの心にあかりを灯しましょう。

恵一 余計なことは言わなくていい。

あかり つまんない男。

恵一 うるさいな。で、映画の話ってなんだ？

あかり 一番好きな映画は何か。

恵一 ん……わからん。

あかり ないことないでしょ？

恵一 たくさんありすぎる。

あかり その中の一番は？

恵一 ……一番嫌いなヤツは言える。

あかり 何？

恵一 言わない。

あかり なんで。

恵一 言いたくないから。

あかり なんでよ。

恵一 口にすると悪夢が甦る。

あかり 悪夢？ 『SAW』とか、スティーブン・キングのヤツ？

恵一 違う。もっと古い映画。

あかり 『シャイニング』とか、『13日の金曜日』とか？

あ、ゾンビもの！

恵一 全然違う。

あかり じゃあ……

恵一 絶対当てられない自信がある。

あかり 意地でも当てたい。

恵一 ……ダメだ。悪い方向に話が流れていく。

恵一、ため息でワインを舐める。

あかり、閃く。

あかり 『卒業』！

恵一 ー。

あかり (確信して) ダステイン・ホフマン、キャサリン・ロス、アン・バンククロフト……。

恵一 ……。

あかり 監督はマイク・ニコルズ。ラストシーン、ダステイン・ホフマンは教会に乗り込み、花嫁のキャサリン・ロスを……を……

恵一 (遮り) やめる！

あかり なるほどね。そうだったんだ。

恵一 何がそうなんだ！

あかり あの時の彼と同じ表情してるもの。情けないというか、間が抜けてるといっつか。

恵一 ……うるさいな。

あかり 略奪されたんでしょ。

恵一 ……。

あかり 可哀相。

恵一 ……。

あかり (涙に気づき) え？ 泣いてるの？

恵一 泣いてない！ ん？ ちよっと待った。あの時の彼と同じ表情って言ったな、今。

あかり 言ったよ。

恵一 どういう意味だ。

あかり どういう、って…… (口ごもる)

恵一 あーっ！、キミ、結婚式から逃げたのか！

あかり バレた？

恵一 ヒドい女だ。男の敵だ。いや、男だけじゃない、全人類の敵だ！

あかり だって、しかたないじゃない。

恵一 しかたない？

あかり カレが来ちゃったんだもん。

恵一 彼？

あかり 元カレ。

恵一 教会に？

あかり ううん、披露宴の最中。お色直しで控え室に戻った時に。

恵一 ……俺は挙式直前だった。

あかり 教会でこの人と一生添い遂げるんだって誓ったんだけどね。

恵一 ……あいつは誓いもしなかった。元カレのことは知ってた。でも、きっぱり別れたって言ったんだ。式の間になっても礼拝堂に現れなかったから控え室に迎えに行った。

あかり 控え室にカレが現れた。泣いてた。泣きながら『おめでとう』って言ったの。

恵一 控え室に彼女はいなかった。代わりに走り書きのメモ。『ごめんね。やっぱり無理』。なんだよ、やっぱり無理って。

あかり カレの『おめでとう』にはありったけの感情が込められてた。私、『ありがとう』って言う代わりに彼の手を握ってた。

恵一 教会の外に出ると、ウェディングドレス姿のあいつが男と手を繋いで走ってた。『待て！』って言いたかったけど、声が出なかった。あいつ、一回も振り返らないで走っていった。

あかり 私は振り返った。結婚するはずだった人が呆然と立ってた。さっきの恵一と同じ表情だった。

恵一 ……。

あかり そうそう、その恨みがましい目。

恵一 恨むぞ！俺は恨んでるぞ！

あかり うん、恨まれて当然だよ。

恵一 当然だ！逃げられた後俺がどんな目に遭ったか判る

か？

あかり 逃げた方だって大変なんだから。

恵一 自分で撒いた種だろ！

あかり そうだけどね。

恵一 ……俺は彼女が男と逃げたって言えなかった。具合が悪くなって控え室で寝てるって親族に伝えた。でも、そんなのすぐにバレる。彼女の親は絶対連れ戻す、心を入れ替えさせるから、って俺と俺の両親に懇願した。

あかり 親に説得されても私は戻らなかった。

恵一 だよな。でも、あの時の俺は信じようとした。怒り狂う親父とはおふくろを説得して礼拝堂に行ったけど……神父は二人揃わないと式は出来ないって。

あかり ……。

恵一 親戚縁者だけの式はともかく、披露宴は中止にするわけにいかなかった。やったよ。一人で入場した時のざわめき、今でも覚えている。花嫁は病気で緊急入院したでことにして宴は粛々と続いた。『花嫁はずっとお色直し中ですよ、ガハハ』と笑うハゲオヤジ。友だちと一緒に写真も撮った。『ホントは逃げられたんじゃないかねえの？』って凶星のジョークを言うヤツもいた。お色直しの花嫁を迎えるため、会場を出た。そのまま帰りたかった。控え室に行ってももちろん彼女はいない。タキシードに着替え、キャンドルサービスの松明みたいなものを持たされて会場に戻る。スポットライトを一杯浴びてそれぞれのテーブルの蝋燭に火を点けていく。みんなの祝福の笑顔、どこぞの俳優の不倫記者会見並に俺に向けられるカメラ、カメラ、カメラ……テーブルクロスに火を点けてやるうかと思った。

あかり ……彼もそうだったんだろうな。

恵一 反省してるのか？

あかり ……微妙。

恵一 ……なんだ、それ。

あかり ……話、続けて。

恵一 ……両親への手紙は俺が代読した。控え室に残ってたからね。両親への花束贈呈も俺が一人でやった。最後の挨拶で、全部ぶちまけてやろうと思った。

あかり ……ぶちまけなかったんだ。

恵一 ……彼女の父親が俺以上に落ち込んでたんだ。手紙の時も花束贈呈の時もボロボロに泣いてたんだ。

あかり ……ふうん、優しいんだ。

恵一 ……おい！

あかり ……何よ、急に。

恵一 ……急にじゃない。俺はずっとムカついてるんだ。

あかり ……私に？

恵一 ……そんなに元カレは忘れられないもんなのか？

あかり ……相手によるよ。全然覚えてない人だっているし。

恵一 ……。

あかり ……その元カレとは会ったことないの？

恵一 ……ない。でも結婚前に全部聞いた。大学の時のサークル仲間で、同棲したこともあるって。

あかり ……そこまで話したんだ。

恵一 ……『ちゃんと好きだった。でも、今はなんとも思っていない』

あかり ……フツー、そう言うよね。

恵一 ……まあ、俺も同棲したことあるし、結婚と恋愛は別だからね、気にしなかった。これからどうという家庭を築いて行くか、ずっと話し合ってきたんだ。

あかり ……でもさ、結婚と恋愛は別なんだよ。

恵一 ……だから……。

あかり ……だ、か、ら。

恵一 二二

あかり ……。

恵一 あ……。

あかり 土壇場で恋愛に走ったんだよね。

恵一 (ため息)

あかり 私もそうなんだよね。結婚相手は小学校の先生でとてもいい人だった。文科省推薦、みたいな。

恵一 ……文科省は推薦したりしない。

あかり 元カレはミュージシャンで、女にだらしないし、お金だって全然なくて、私もずいぶん貸した。

恵一 典型的ダメ男。

あかり うん。でも、ドキドキさせてくれるの。思いがけない時にキスしてくれたり、逢いたいって言ったら夜中でもバイク飛ばして会いに来てくれた。

恵一 サカリがついたヒマ人ってことだろ。

あかり 鎌倉でデートした時にね、私のために作った曲を歌ってくれたの。海に沈む夕陽を見ながら聞いてたらホントに心と体がとろけちゃった。

恵一 だけど、ダメ男と判ったから別れたんだろ？

あかり うん。その時はきっぱり。

恵一 きっぱり？

あかり 人間ドキドキだけじゃ生きていけないって判ってるから。

恵一 判ってるんだったら……。

あかり 他の元カレたちと一緒に、思い出しもしなかったんだよ。でも、あの日、突然現れた彼を見たら……

恵一 追い返せよ。

あかり でも、手を握っちゃったの。そしたらビビっと来た。

私はここにいるべきじゃない、って。

恵一 残された男にどんなことが起こるか考えなかったの

か。

あかり 全然。

恵一 あのなあ。

あかり 考えなかつたから行けたんじゃない。

恵一 偉そうに言うな。

あかり 結婚式場から連れ去られるチャンスなんて一生に一度あるかないか。行くしかない！

恵一 お前が主導したのか！

あかり 今までのどんなエッチよりも昂奮した。後先考えずに走った。彼のバイクに跨り……あ、彼バイクで来てたのね。

恵一 判るよ、話の流れで。

あかり 彼がアクセルを吹かすとぐんぐんホテルが遠ざかっていくの。披露宴はホテルだったのね。

恵一 説明いらない。

あかり ウエディングドレス姿の私を乗せて、バイクは風になった。夢の世界目指して風になった！

恵一 ……酔ってるね。

あかり まだ飲めるよ。もう一本行く？

恵一 もう頼んだ。

あかり さすが！

恵一 で？ 実際はどこに行ったの。

あかり ……彼の部屋。

恵一 ……。

あかり 別れた時と同じ薄汚れた部屋。かび臭かった。ああ、この人全然成長してないんだな、って思った。せめてその日ぐらいは夢を見せてほしかった。海の見えるホテルに連れてってほしかった。それでも私、彼を求めちゃつたんだよな。

恵一 ケモノだ。

あかり そうよ、私はケモノ。

恵一 その頃、残された花婿は笑顔を振りまきながら泣いていた。

あかり 私も翌日は泣いた。だって、クズ男はやっぱりクズなんだもん。

恵一 お、ダメ男からクズ男に出世か。

あかり 私を奪ったのはいいけど、あとのこと何も考えてないんだもん。

恵一 ちょっと待った。だいたいそいつは『卒業』やろうと思って披露宴会場に來たわけじゃないだろ？ ホントにおめでとうって祝福しに來ただけだったんじゃないか？

あかり 一緒に逃げたんだよ。

恵一 そのクズ男も被害者だな。

あかり あんたの花嫁はどうなったの。逃げた男と一緒にになったの？

恵一 ……うちの場合は計画的だった。その日の夜にハワイに高飛び。

あかり へー。そのまま帰って来ず？

恵一 いや、相手の男はフツのサラリーマン。

あかり じゃ、有休取って逃避行…。

恵一 ああ、だから二週間後に成田に戻ってきたところを捕まえた。

あかり なんと。

恵一 俺は一発殴って終わりにしたかったけど、逆に訴えられかねないって弁護士から止められた。

あかり 弁護士？

恵一 ああ、親父が弁護士雇って彼女と男に損害賠償請求した。

あかり わー。

恵一 素直に謝ったら許すつもりだったけど、あっちも弁護

士を立ててきた。その弁護士がまたバカで、火に油を注ぐようなことばかり言って、親父もキレて慰謝料増額した。一年経ったけど、裁判は継続中。

あかり 泥沼。

恵一 ああ。

あかり よかった、訴えられなくて。

恵一 訴えられりやよかったんだ。

あかり 負けてもお金払えないからね。

恵一 お灸据えなきゃダメなんだ。絶対またやるだろ。

あかり やんないよ。もう懲り懲り。

店に客が入ってくる。

恵一とあかり、同時に目をやり、そんなお互いに気づき、ハツとなる。

恵一 まさか……クズ男を待ってるのか？

あかり まさか！ あんたは誰待ってるの。

恵一 ……。

あかり 逃げた奥さんだ。

恵一 ……入籍前だから奥さんじゃない。

あかり やり直したいの？ 絶対無理なんじゃないの？

恵一 ……あっちから会いたって言ってきたんだ。

あかり じゃあなんで来ないのよ。

恵一、答えず、自分のグラスにワインを注ぐ。が、ほとんど入ってない。

あかり (店員に) すみません、もう一本！ 同じヤツでいいから。

恵一 俺、酔ったよ。もういい。

あかり 私、全然。もっと飲もうよお。

恵一　しかし、なんでキミと飲んでるんだ？
あかり　あ？
恵一　誰だっけ？
あかり　あかり。内田あかり。
恵一　俺は誰だっけ？
あかり　えーと、判んない。

店員がやってきて、二人の前に水の入ったグラスを置く。

あかり　水じゃなくて。ワイン注文したんだけど。
店員　あかりちゃん、もう閉店時間過ぎてるんだけど。
あかり　あ……誰もいない。
恵一　帰る。

恵一、水を飲み干して立ち上がる。

あかり　待って。(しゃっくりしながら店員に) 客がいなくなるまでやる、んじゃないの？

店員　あかりちゃん、もう諦めなよ。

あかり　今日は絶対来るから。

店員　来ないって。

恵一　やっぱり元ダン待ってるのか。

あかり　もう一度やり直したいの。

恵一　お前の顔なんか見たくもない！

あかり　そんなこと言わないでー

恵一　勝手すぎるだろ。

あかり　ごめん。ちゃんと謝りたいの。

恵一　もういい。

と、椅子から立ち上がる。

あかり あつ、行かないで！

と、追いかけてようとするが、ふらつき、倒れそうになる。

恵一、慌てて抱きとめる。

■ バル・店内

—翌日の夜。

そこそこ繁盛している。

恵一が恐る恐る覗き込む。

店員 いらっしやいませ。あ、昨日の……。

恵一 ……どうも。

店員 お好きな席にどうぞ。

恵一 お水もらえますか？

店員 水、ですか？

恵一 はい。とりあえず大量に。

店員 (察して) あー、はい。

と、行きかける。

恵一 あの……。

店員 はい？

恵一 俺、昨日お金払いました？

店員 ちゃんといただいています。

恵一 (少しホッと) そうか。

店員 覚えてないんですね。

恵一 ……ええ、まあ。

店員 彼女と肩組んで出ていきましたよ。

恵一 ……そうでしたよね。それからどうしたんでしょ。

店員 俺に聞くんですか？

恵一 ……判るわけないですよね。

店員 想像はできますけど。

恵一 ……。

そこへ、あかりが入ってくる。

恵一、あかりをチラと見る。あかりも恵一を見るが、お互い無反応。

店員 あれ？

恵一 え？

あかり (店員に) どうも。私、昨日お金払った？

店員 はい？ (と、恵一とあかりを交互に見る)

恵一 (あかりを見て) あ？

あかり (恵一を見て) はい？

恵一とあかり、お互いを見る。

店員 (苦笑して) 二日連続ご来店ありがとうございます。

と、カウンターへ。

恵一 ……。

あかり ……。

あかり、確信が持てないが、恵一の前に座る。

恵一 ……どうも。

あかり 昨日の？

恵一 ……だと思う。

あかり 覚えてないの？

恵一 あんただって…。

あかり (声を潜め) ……朝起きたらラブホのベッドだった。

恵一 ……。

あかり あなたはどうしたの？ この店出てから。

恵一 ……帰ったんじゃないかな。

あかり 今日会社に行った？

恵一 行った。

あかり 同じネクタイ。

恵一 ん？

あかり 家に帰らなかったんじゃない？

恵一 (曖昧に) いや…。

あかり、ポケットからキーホルダーを取り出して見せる。

恵一、！

あかり あなたのでしょ？

恵一 ー。

あかり なんで嘘つくの。

恵一 あ、いや…。どこにあったの？

あかり ベッドの下。

恵一 ……。

あかり (顔を近づけ小声で) なんで朝いなかったの。

恵一 ……わかんない。

あかり わかんないことないでしょ。

恵一 スマホの目覚ましで目が覚めた。自分がどこにいるか判らなかつたけど、とにかく会社に行かなきゃと思ってあちこちに散らばった服を集めて部屋を出た。そこでラブホテルだと判った。頭がぐるぐるんぐるん回って、ズボンを履こうとしたけどうまくできなくて何度も転んだ。壁を伝って外に出て、たまたまた通りかかったタクシーを拾った。相当酒臭かったんだろうな、運転手に露骨に嫌

な顔をされた。会社では誰も近寄ってこなかった。もちろん全く仕事にならなかった。来客がなくて本当によかった。

あかり (イライラ聞いている) やってないよね？

恵一 やって、って……。

あかり (じつと恵一を見ている)

恵一 (ハツと) まさか！ (ありえない)

あかり 私、裸だった。

恵一 |。いやいやだからって……。

あかり じゃ、なんで私は裸だったの。

恵一 勝手に脱いだんじゃないの？

あかり 私、裸で寝る習慣はない。

恵一 俺にもない。

あかり 私、エッチの時は必ず全部脱ぐんだよね。よくいるじゃない、下だけ脱いでやるカップル。

恵一 そ、そうなの？

あかり やったことあるでしょ？

恵一 ん……。

あかり きつとあなたが手抜きしてやろうとしたのを私が全部脱いでって言ったんだと思う。

恵一 ん……あ、いや、やった前提になってるし。

あかり だって！

恵一 証拠ないでしょ、証拠。

あかり 証拠？

恵一 キスマークとか。

あかり ちょっと見て。どこかにない？

と、首筋を見せる。

恵一 コンドームとか、ティッシュとか、状況証拠も……。

あかり (遮って) あった！

恵一 え？

あかり コンドーム。

恵一 嘘だろ。

あかり 未使用だったけど。

恵一 (ホツと) よかった。

あかり ……生でやったんじゃないの？

恵一 え。いやいや。(周囲を見回し) 声を抑えて。

あかり あなた覚えてないんでしょ？ だったら否定できないで
しょ。

恵一 いや、酔ったら…。(と、言いかけてやめる)

あかり 勃たなくなるタイプ？

恵一 そ、そんなことはないけど…。

あかり ほらね。

恵一 判った。

あかり なにが。

恵一 キミって肉食系だよね？

あかり 魚より肉が好きだけど？

恵一 そうじゃなくて。

あかり ああ。肉食系なんて言い方、イマドキする？

恵一 え？ 言わない？

あかり (首を竦め) 私は自分に素直なだけ。

恵一 って？

あかり 好きな男には…。(と言いかけ、恵一を改めて見る)

恵一 (戸惑い) 何。

あかり そんな顔してたんだ。

恵一 そんな顔って…。

あかり 昨日酔っ払って顔をよく見てなかったから。

恵一 ……俺も。

二人、しばし瞞め合う。

あかり 嫌いじゃない。

恵一 |。

あかり 判った。だからか。

恵一 何の話だよ。

あかり 私、好きなんだ、あなたのこと。

恵一 冗談やめるよ。

あかり じゃないとしないもん。

恵一 してないって。

あかり したの。

恵一 ……したとしたら、したとしたらだよ、同情からだろ？

あるいは贖罪。

あかり 違う。

恵一 いや、そうだ、って。

あかり 私が傷つけたのは元ダンだよ。なんであなたに贖罪しなきゃいけないの？

恵一 そんな気持ちになっただんじじゃないの？

あかり なんて素直に受け取らないのかな。私に好きになられたら迷惑？

恵一 ……え。

あかり 彼女いるの？

恵一 そんな気にならない。

あかり 逃げられてもう一年経ってるんでしょ？

恵一 裁判中だし。女は信用できない。

あかり そっか。

恵一 そっちは？ クズ男とやらだら続いでるんだろ？ いや、思い出した。昨日元ダンが来るのを待ってたよな？

あかり ……うん。来ないことは判ってたんだけど。

恵一 そうか。

あかり ……。

恵一 ……。

客が入ってくる。

思わず凝視する二人。

客、ビビる。

恵一とあかり、改めてお互いを見る。

ミュージシャンの歌う「スカボロ・フェア」が流れてくる。

■ ライブハウス

ミュージシャン、スポットライトを浴びながら気持ちよ
さそうに歌う。

下手。

■ 同じバル・店内

—二ヶ月後。

あかりが一人で飲んでいる。不機嫌。

恵一が入ってくる。

あかり、！

恵一、店内を見回し、あかりを見つけ笑顔で近づく。

恵一 やあ。

あかり、立ち上がるといきなり恵一の頬を引っ叩く。

恵一 —。何だよ。

あかり こっちのセリフ！ どうして二ヶ月も連絡しなかつた
の。

恵一 急に海外出張になって……。

あかり 海外でも連絡ぐらい取れるでしょ。

恵一 マラウイにいたんだ。

あかり は？ どこそれ。

恵一 アフリカの南東部にある国。直行便がないからバンコクとナイロビで飛行機乗り換えてまる二日かかるんだ。

あかり なんでそんなところに。

恵一 俺、国際協力NGOのメンバーなんだ。

あかり NGO？

恵一 開発援助、人道支援を行う非営利の民間協力組織。

あかり (ポカんと) なんで。

恵一 なんでって言われても……。

あかり 連絡取るうと思っただら取れたはず。

恵一 いや、無理だったんだって。

あかり もういい。

と、席を立つ。

恵一、あかりの腕を掴む。

恵一 裁判、終わった。

あかり え？

恵一 結婚式をバックしたあいつを損害賠償で訴えただろ？

あかり あ、ああ。

恵一 俺は海外にいたから親父に任せっぱなしだったんだけど、こちらの要求が100%認められた。

あかり 慰謝料いくらなの？

恵一 そういうことじゃなくて。

あかり おめでとう！ これでいい？

恵一 でも、まだ夢を見る。

あかり え？

恵一 あの夢だ。結婚式の最中に花嫁に逃げられる夢。

あかり ああ。

恵一 マラウイでも毎日のように見た。目が覚めて夢だと思っ
ってホッとしたら、それも夢でまた逃げられる。その夢

から覚めたと思ったらまだ逃げられて……悪夢の無限ループ。

あかり ……。

恵一 断ち切りたかった。だから『卒業』を見直した。

あかり 荒療治ね。

恵一 ああ。逆効果になるかもしれない。でも、救いになるかもしれないと思い、藁をもすがる思いで観たんだ。そしてたら……(言い淀む)

あかり 逆効果だった？

恵一 いや。記憶と違ってたんだ。映画の印象が。

あかり そりゃ観たのが昔でしかもトラウマが残った映画でしょ？ 記憶と違ってもおかしくないでしょ。。

恵一 いや、ストーリーは覚えていたし、アン・バンクロフトがダスティン・ホフマンを誘惑するところや、教会に乗り込んで窓ガラスを叩きながら「エレイン！」と叫ぶシーンも記憶と同じだった。

あかり 教会のドアを十字架で開かなくするんだよね。

恵一 そして二人は通りかかったバスに乗り込み、一番後ろの座席に座る。

あかり 最後は去っていくバスで終わるんだよね？

恵一 ……ああ。その時の顔が違うんだ。

あかり え？

恵一 二人ともしてやったりの表情をしてたはずだった。

あかり そうだったでしょ？

恵一 二人は顔を見合わせて微笑むけど、言葉を交わさない。いや、交わす言葉がないように見えたんだ。二人はそのままバスが走っていく方向に顔を戻した。そして再びお互いを見ることはなく、バスに揺られるんだ。

あかり つまり……。

恵一 二人は略奪を後悔したんじゃないかな。

あかり ……。

恵一 ……。

あかり そんなわけないでしょ。

恵一 そうとしか見えなかった。二人はきつとうまくいかない。やっぱり人の幸せを奪ったヤツは報いを受けるんだ。逃げた直後か何年後か判らないけど、二人は絶対に別れる。別れ話がこじれて刃傷沙汰、アメリカだと銃で射殺—どっちが殺されるか判らないけど、それがきつと『卒業』の本当のラストなんだ。

あかり 恵一がそう思うのも判る。

恵一 ……あいつと男も別れたそうだ。

あかり え？

恵一 詳しくは聞いてないが、慰謝料の負担割合をどうするかで揉めたらしい。

あかり そうなんだ。

恵一 (明るく) 天罰だよ、天罰。

あかり かもね。

恵一 これで障害はなくなった！

あかり 障害？

恵一 俺たちの間にあった障害だよ。

あかり ……。

恵一 結婚しよう。

あかり 無理。

恵一 はい？

あかり 障害あるもん。

恵一 障害って…。

あかり 私、結婚するの。

恵一 ああ、結婚するよ、俺たち。ん？ 俺以外の男とって
ことか！

あかり そう。

恵一 俺たち、結婚の約束したよな？

あかり あれ、約束だったの？

恵一 ちゃんと言ったよな？

あかり 言いつばなしで消えて、二ヶ月音沙汰なし。本気なのか
確かめることもできなかった。

恵一 どうして疑うんだよ。

あかり 私たち、会うの今日が三回目だよ。

恵一 回数の問題じゃないだろ。

あかり 初めてここで会った日にホテルに行って朝まで一緒に
いた。

恵一 ああ。

あかり 二回目は翌日の夜。ここでまた会い、ホテルに行っ
た。

恵一 で、ちゃんとセックスして、翌朝結婚の約束をした。

あかり それから？

恵一 え？

あかり 翌日から連絡取れなくなった。

恵一 急にマラウイに行くことになってバタバタしてたんだ。

あかり 連絡しなくても待つてくれると思ってたんだ。

恵一 ……。

あかり 一日や一週間じゃない。いつ連絡が来るかと待ち続け
た。

恵一 プロポーズして一週間後、飛行機に乗って初めて余裕が
できた。キミに電話かメールしようと思った。その時思
い出したんだ、連絡先を聞いてないことに。

あかり この店に電話すればよかったじゃない！

恵一 あ……。

あかり どうしてそんなことも考えつかなかったの。

恵一 ……。

あかり 本気じゃなかったんでしょ。

恵一 そんなことない。
あかり そう受け取った私が悪いの？
恵一 ……
あかり (ため息で) バカだよ、ホントに。

と、席を立ち、出ていこうとする。

恵一 (腕を掴み) 誰と結婚するんだ！

あかり 誰でもいいでしょ。

恵一 よくない。元ダンか？

あかり 違う。

恵一 じゃあ… (ハッと) ミュージシャンに

あかり …… (肯定の沈黙)

恵一 あのクズ野郎か！

あかり あなたにクズ呼ばわりする資格がある…

あかり、恵一を一喝して店を出ていく。

恵一、呆然と見送る。

■ ライブハウス

ミュージシャン 俺、よくクズ野郎って言われます。ゲス野郎と言われたこともあります。でも、俺は音楽を裏切らない。音楽も俺を裏切らない。…最後の曲、聞いて下さい。「サウンド・オブ・サイレンス」

ミュージシャン、歌う。
下手。

■ 同じバル・店内

――週間後。

恵一、ビールを煽り、飲み干す。

恵一 (店員に) もう一杯下さい。

店員 ピッチ早いですね。

恵一 喉がカラカラで。

店員 そうでしょうね。

と、呆れ顔で奥へ。

恵一、ため息をつく。

トイレからウェディングドレス姿のあかりが出てくる。

店内の客たち、あかりを見る。

あかり あー、スッキリした。

と、恵一の隣に腰掛ける。

恵一、あかりを見る。

あかり、微笑む。

恵一、ため息をつく。

あかり (笑って) 何よ、どうしたの。

恵一、言いかけるがやめる。

あかり あ、スッキリってトイレのことじゃないよ。私の人生のこと。

恵一 ……。

店員がビールを持ってくる。

あかり なんでビールなの。シャンパンでお祝い！ (店員に) ドンペリちょうだい。

店員 ご用意しておきました。

あかり ありがとう。

店員、奥へ。

恵一 (怪訝) 用意しておいた？

あかり (恵一の手を握り) 来てくれると信じてた。

恵一 ……本当によかったのか？

あかり いいに決まってるじゃない。

恵一 ……。

あかり 結婚式場から二回も奪われたのって私ぐらいだよ。すっごく昂奮した。

恵一 ……。

あかり どうしたのよ。

恵一 ……これでいいんだろうか。

あかり だから、いいに決まってるって！

店員がドンペリを持っていてグラスに注ぐ。

あかり (恵一にグラスを持たせ) はい、乾杯。

恵一 ……。

あかり 私たちの未来に！ (と、恵一のグラスにぶつけて飲み干す)

恵一 ……。

あかり (その様子に) ねえ！

恵一 ……これから悪夢を見るんだろうか。

あかり どうして。見てないんでしょ？ また見るわけないですよ。

恵一 あいつが、だよ。

あかり あいつって？

恵一 ミュージシャン。二人が誓いのキスをしようとした時に俺が乱入した。あいつのあ然とした顔が忘れられない。

礼拝堂を出ていく時、あいつは恨めしそうに俺を見ていた。俺は加害者になった。

あかり リベンジしたと思えばいいじゃん。

恵一 ……俺はクズだ。

あかり 気にしない気にしない。

恵一 あかりは気にしないのか？

あかり 気にしないって。

恵一 そうだろうな、じゃなきゃ二回も結婚式から逃げ出さないよな。

あかり あ、そう！ じゃ、私、あいつのところに戻るよ！

恵一 それは……。

あかり 嫌なのね？

恵一 ああ。

あかり じゃあ気にしない。

恵一 ……。

あかり (ジれて) もう！ あいつだって祝福してくれたんだから。

恵一 え？

あかり あかりが恵一のこと为本当に好きなら俺は諦める、って。

恵一 あいつはそんなこと言ってない。ただただ絶句してた。

あかり 言ったの。

恵一 だからいつ！

あかり 一週間前。ここを飛び出した私を追いかけて来てくれたでしょ？

恵一 ……あの時、俺はプロポーズした。

あかり 私はその足で彼に会いに行き、別れてほしいと言ったの。そしたら彼は言ったの。

男の声 あかりがそいつのこと本当に好きなら俺は諦める。

ミュージシャンがギターを抱えて現れる。

恵一、あ然。あかりはニコニコと見迎える。

店員も出てくる。

あかり 彼がシチュエーションを作ってくれたの。もちろん、お店の彼も協力してくれた。恵一が来たことを知らせてくれたし、今日のこともうまく誘導してくれた。(二人に) ありがとう！

店員 どういたしまして。

ミュージシャン、ギターをかき鳴らす。

恵一 (呆然と) 何のために……。

あかり トラウマを克服してもらったため。悪夢を見なくなるよ
うに。

恵一 ……。

あかり 嬉しくないの？

恵一 ……。

店の明かりが消え、恵一にスポットライトが当たる。

恵一 きっと今の僕は「卒業」のラストのダスティン・ホフマンより微妙な表情をしているだろう。

サイモンとガーファングルの「サウンド・オブ・サイレンス」が流れて――

――THE END――